

蘇原地区 4月24日(木) 蘇原ふれあいセンター

○参加人数 51名

【懇談会要約】

■三戸(1番テーブル)

若い世代や移住者をもっと地域の議論に巻き込むべきとの意見が出されました。今後10年を見据えたまちづくりには、関係人口の拡大が欠かせないとの考えから、SNSやYouTubeなどを活用して町の魅力を発信していくことの重要性が指摘されました。地域資源である隠居山観音やクオーレの里のPRや、山の魅力を継続的に伝えていくことも求められました。廃校については、白川らしい特色ある学校として再生させる案が出され、リフォームによる機能の刷新も必要との声がありました。

■杉山(2番テーブル)

将来の暮らしに対する強い不安が共有され、特に子育てや介護の体制をどう整えるかが課題とされました。人口流出を防ぎ、移住者やUターン希望者を増やすためには、まず町のインフラ整備が必要であるとの意見が出されました。国道41号や県道の整備促進とともに、白川町の魅力を町民自らが発信する「全員営業マン」的な取り組みが提案されました。こうした町ぐるみのPRは、移住や観光の促進にとどまらず、町への誇りにもつながるとされました。

■伊佐治(3番テーブル)

農林業の未来に不安がある中、賃金水準の低さが大きな課題として挙げられ、雇用環境の改善が必要とされました。自然環境に魅力を感じて移住する人もいますが、定住には住宅や農地、就労の受け皿づくりが不可欠とされました。リニア駅開業によって東京通勤圏になるという利点を活かし、リモートワークと組み合わせた移住促進策が提案されました。廃校の宿泊施設化により町内商店の利用を促す構想や、国道41号「上麻生防災事業」の笹平への残土搬入についての意見も出されました。

■田口(4番テーブル)

白川町の自然を活かした観光振興策として、山登りや自然とふれあう場の整備が求められました。将来的なインフラ維持の負担を見据え、住民を拠点に集めるコンパクトなまちづくりの構想も示されました。また、高温や獣害の影響により、地元の大豆が不作となり、佐見豆腐の原料が町外産に切り替えられた例が紹介され、農業の基盤が揺らいでいる現状が共有されました。自然との共生と安定した生産の両立が、今後の大きな課題とされました。

■佐伯(5番テーブル)

自治会や自治協議会の運営負担が大きく、自治協議会長の役割の重さや、若年層の担い手不足が深刻な課題とされました。特に、厄年制度の維持が困難になっており、組織全体の簡素化や、LINEなどITを活用した連絡手段の導入が求められました。また、自治会の合併によって区域が広がったことで、草刈りや美化活動の負担が増えている現状も指摘されました。今後は現実的な制度設計とともに、運営体制の見直しが必要であるとの意見が出されました。

■梅田(6番テーブル)

このグループでは、人口が減っても豊かに暮らせるまちを目指すという前向きな姿勢が共有されました。少人数でも機能する地域のモデルづくりや、産業を守るための協力体制の必要性が話し合われました。町の活性化に向けては、研究機関の誘致や企業への積極的なPRが提案され、地域産業の振興と雇用創出への期待が寄せられました。さらに、廃校施設の利活用で

は、スポーツ交流や合宿に向けた施設活用の提案もあり、白川の特性を活かした新たな可能性が語られました。

■今井（7番テーブル）

終活や人口減少への危機感が共有され、「10年後には人口が4,000人を下回る」という見通しの中、地域運営の簡素化が急務であるとの意見が出されました。自治会の統合や役職削減の必要性に加え、移住者の受け入れ強化も重要視されました。現在でも年に25人ほどが移住していますが、年間200人近く減少している現実には追いつかず、抜本的な対策が必要との声が上がりました。空き家の活用と支援制度の拡充を通じて、持続可能な地域の構築を目指すべきとの認識が共有されました。

■渡辺（8番テーブル）

若者の都市流出が進む中で、白川町の静かな環境を活かし、在宅ワークを前提とした新しい働き方の支援による移住促進の必要性が語られました。空き家の活用による受け入れ体制の整備も急務とされました。また、企業誘致が難しい現状を踏まえ、地域資源を活かしたまちづくりが求められました。廃校については、大型遊具やアスレチックを備えたリゾート型施設として整備し、宿泊型体験施設とすることで交流人口を増やす構想が提案されました。

■藤井（9番テーブル）

廃校を再活用する案として、高齢者の「学び直しの間」として整備する提案が出されました。基礎教育や歴史学習など、生涯学習の拠点として活用することで、地域の学びの機会を広げていく構想です。また、災害時の避難所としての機能も重視され、山間部では仮設住宅の建設が困難なことから、校舎の保存が有効とされました。加えて、廃校をロケ地として活用した事例を町のホームページなどで広く発信することで、町の魅力向上にもつなげたいとの意見が出されました。

【蘇原地区のまとめ・特性】

自然や健康、交流といった地域の魅力を活かしながら、前向きなまちづくりを目指す姿勢が強く感じられました。ウォーキングやスポーツ施設、体験観光や移住ツアーなど、交流人口と定住促進を両立させるアイデアが多く出されました。一方で、農業や山林の担い手不足、自治協議会等の運営負担、情報伝達手段の効率化など、地域の持続可能性に関わる課題も共有されました。人口減少が進む中でも、地域の魅力を活かし、豊かに暮らせる仕組みをつくるための建設的な議論が交わされました。